

〔陰徳太平記 三十二〕杉原忠興死去附妾貞順事

忠興病日ヲ迎ヘテ重クナリ、已ニ今ハノ際ニ成ケレバ、彼妾ヲ近付、吾已ニ娑婆ノ縁盡テ、黄泉ノ旅ニ赴ナントス、只今生ニ思置事トテハ、御身ノ名殘計也、御コト年イマダ三十二ハ、ハルカニ及ブベクモナケレバ、行末久シク春秋ニ富ル身也、相カマヘテ、吾ナキ跡ニ、髮下シ、尼ト成事不可有、又イカナル人ニモ相馴給ヘ、露恨トハ思マジナド細ヤカニ搔口談ケレバ、彼女房何トモイラヘハセズ、唯涙ニ咽テ在ケルガ、用アル様ニテ傍ヘ立ノキ、刺刀ニテ兩ノ小鼻ヲ立様ニ二所裁割、緑ノ髮ヲ肩ニダモ掛ラズ、押切テ立出、忠興ニ向、又人ニ見エザラント思ヘバ、カ、ル姿ト成テ候ト云ケレバ、忠興大ニ驚キ、カ、ル貞順ノ女モ有ケルニヤ、此志ノ程七度生ヲ代ルトモ、更ニ忘マジキゾトテ涙ヲ流シケルトカヤ、

〔老人雜話 下〕多賀信濃守は豊後守が子也、鼻くた也、山崎合戦の時、明智に屬すと云へども、味方の負を早く知り、桂川の渡し守に錢拾貫與へて、信濃守者をば早く渡せと云て逃崩す人也、

〔諺臍の宿替 三〕目から鼻へぬける人

これ見ておくれ、ア、いたい／＼と、どふするのじや、此とふりに、目からはなへぬけ通とほりてじやがナ、

仰鼻
垂鼻

〔伊呂波字類抄 安〕人體、厓久ア不マ雨ウ上ケハナ、冠天、胤アマウケハ

胤ナ、仰鼻也、

〔落窪物語 四〕四の君の御人は、あやしきことかな、これにはいみじうほめ給ふめるものを、はなこそなかにをかしげにて、おはすとこそいはるめれとの給へば、少なごんてうろうしきこえさせ給へるなり、御はななんかにすぐれて見ぐるしうおはする、はなのうちあふぎいら、ぎて、あなの大きなることは、左右にたいたて、まんでんもつくりつべくなどいへば、いといみじきことかな、げにいかにいみじう思ひ給らんなど、かたらひ給ふほどに、中將の君うちより、いといたう